

つなぎあって元気に

No.56
2016 春号

福島原発事故から5年

福島に祈りを

4月、上官小学校と大牟田小学校が合併し、大牟田中央小学校としてスタートしました。

大正2年に、第五大牟田尋常小学校として開校した上官小学校は104年、旧不知火小と旧笹林小が合併して昭和58年に開校した大牟田小学校は30年の歴史に幕を降ろすことになり、3月24日には上官小、25日には大牟田小で閉校式が行われました。



3月24日 上官小学校閉校式

式典後、子ども達によるアトラクション、学年毎に歌や合奏等の発表、締めくくりは全校児童110人で合唱、思い出の詰まった学校に別れを告げました

「いのちを想う キャンドルナイト イン 大牟田」が築町公園で開催されました。

美しい賛美歌、心にしみる福島の詩の朗読、そして、力強い演奏と歌声、竹灯籠の優しい灯りの中、犠牲となられた方々への鎮魂の想い、まだまだ厳しい避難生活を送っておられる被災地へのエールを、五月橋から、東北に、そして福島の皆さんに発信しました。

私は、福島の武藤類子さんからのメッセージを紹介させていただきました。「放射線量が下がりきっていない中でのがせられる帰還、賠償の打ち切り、増え続ける子どもの甲状腺癌、新たに振りまかれていく放射線安全神話、先のない原発廃炉作業、過酷な被曝労働に従事する作業員は1日に7000人：」類子さんの怒りと悲しみがいつぱいの文章を読みながら、人を人とも思わない政治に：今でも続くフクシマの苦しみ：胸が痛くなりました。



一方で、次のことばに元氣もいただきました。「どんな状況でも：つながり、諦めることなく、一人ひとりが出来ることをやっていきましょう 2016.3.11 福島より 武藤類子」

平山光子後援会

事務所
大牟田市原山町1-5
0944-53-1661
自宅
大牟田市倉永1651
0944-58-1252
携帯
090-9077-0226
メールアドレス
mitsuko2007@tnebbia.jp
ホームページ
www.mitsuko-hirayama.net
フェイスブック
www.facebook.com/mitsuko.hirayama.7

母と女性教職員の会 陳情

2月15日、母と女性教職員の会の皆さんと、市長・教育長陳情を行いました。子育てや教育環境の充実を願って、2105筆の署名と共に陳情書を中尾市長と安田教育長に直接お渡しした後、自由な意見交換の時間もいただきました。お母さんや先生からは、校舎の問題、特別支援員の増員、不登校の悩みなど様々な課題や悩みが伝えられ、市長、教育長にはしっかりと話を受け止めていただきました。当時4校区しかなかった児童の増設を訴えて、先輩の江崎アツ子先生が始められたこの陳情は20年以上続けられており、成果をあげています。



炭鉱労働の歴史・フィールドワーク

2月20日、冬の人権連続講座「世界文化遺産で注目されている三池炭鉱で厳しい労働に従事した人々(囚人労働、外国人労働)について学ぶフィールドワークに参加しました。三池集治監(刑務所跡)↓解脱塔(囚人墓地)↓馬渡記念碑↓宮原坑のコースです。市内外から大勢の参加がありました。やはり世界遺産効果でしょうか。馬渡記念碑前では、社宅の壁書きの発見者、在日コリアン二世のペ・トンノクさんが待っておられ、当時のご苦労等、様々な話を聞くことが出来ました。



困りごと・わからないこと
市政相談お待ちしております



平山光子 2016.3月議会 一般質問の報告

1. 困難を抱える子どもの支援

中尾新市長は、地域の総合力を高めるためには、子育て支援や教育の充実に取り組みなければならないとして、次期総合計画「まちづくり総合プラン」や新年度予算の中にも様々なその想いを盛り込まれました。

しかし、全国的にも報道されているように、現状は厳しい状況の子ども達がたくさんおり、本市も例外ではありません。少子化・人口減少が大きな課題になっていますが、せっかく生を受け、育てている子ども達が、それぞれの個性や能力を發揮し、ふるさと大牟田で健やかに育つことが出来るような環境作り、施策・事業の推進、予算の確保を、さらに求めていきたいと思えます。

そのような観点から、困難を抱える子どもの問題について、今回は、発達支援の問題を中心に取り上げました。

(1) 特別支援教育とインクルーシブ教育

インクルーシブ教育、つまり、共生（共に生きる）社会の形成に向けた教育の理念に沿って、特別支援教育が充実されるよう求めました。今年4月に、障がい者差別解消法が施行され、さらに教育の役割が重要になると考えています。

(2) 発達障がいへの理解と啓発

自閉症、学習障がいなどの言葉は知られてきました。しかし、その発達の特性については、まだ十分理解が進んでいるとは言えません。その結果、「親の育て方が悪い、わがまま」などと、周りの無理解で苦しんだり、自信をなくす、学ばなくなる、いじめられる、不登校になるなど、いわゆる二次障がいにつながったりすることや、保護者が、子どもを追い詰めたり、発達障がいの相談をためらったりするなどの状況もあります。特性に合わせた支援へと早期につながられるよう、さらなる市民周知を求めました。

(3) 早期の発達支援

子どもの発達に不安を感じたとき、身近に専門性の高い、相談しやすい場があることが大切です。常時の相談や支援の拠点としての発達支援のセンターが必要として、久留米の取り組みを紹介し、本市も設置するよう求めました。

(4) ことばの教室

通級教室の一つ「ことばの教室」は、設置から約20年が経過しており、発音や聞こえなどに不安のある児童の教室として支援にあたり成果をあげてきました。しかし、担当教員が数年で変わり、経験の継承、人員体制などの課題があります。他市では、ニーズに応じて教室が増設され、課題が解消されています。本市では、1教室のままなのは周知不足があるのではないかとして改善を求めました。また、他市で行われている「幼児のことばの教室」の必要性も訴え、設置を要望しました。

2. 平和の問題について

(1) 核兵器廃絶平和都市宣言30周年事業

昨年は、あらゆる核兵器の廃絶と恒久平和の実現を願って、本市が核兵器廃絶平和都市宣言をしてから30年の節目の年でした。記念事業「平和のつどい」が行われ、ほかにも様々な取り組みが行われたことは大変意義深いことだったと思います。その取り組みの総括を尋ね、今後の事業継続を求めました。



(2) 本市の平和教育とユネスコスクール

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は先の大戦後、教育や文化の振興を通じて、戦争の悲劇を繰り返さないとの理念により設立されました。ユネスコスクールの取り組みを通して子ども達に託す思いについて尋ね、理念の共有化と取り組みの充実を求めました。



(3) 佐賀空港へのオスプレイ配備

県が設置する「佐賀空港へのオスプレイ等の配備計画に係る情報連絡会」の呼びかけに、みやま市、柳川市、大川市は参加しているのに、本市は未参加です。経緯を尋ね、いち早い情報把握のために参加を要望しました。

3. 世界遺産登録と炭鉱労働の歴史

(1) 石炭産業を支えた人々に着目した学習

世界遺産登録され、三池炭鉱で働いた人の歴史への関心も高まっています。市民が我が町の歴史を知ると共に、遠方からのリピーターとしての来訪者増のためにも、近代化産業遺産の施設だけでなく、働いてきた人に注目した企画を考え、広く発信してはどうかと提案しました。